

朝鮮の諸新聞に見るピアニスト小倉末子の
京城演奏旅行（1916年12月）

津 上 智 実

Pianist Suye Ogura's Concert Tour to Keijo (1916, December) as Reported by
Six Newspapers in Chosen (Colonial Korea)

TSUGAMI Motomi

神戸女学院大学 音楽学部 音楽学科 教授

連絡先：津上智実 〒662-8505 西宮市岡田山4-1 神戸女学院大学音楽学部音楽学科
tsugami@mail.kobe-c.ac.jp

Summary

This paper aims to report my research on newspaper articles published in Chosen on a concert tour by the Japanese pianist Suye Ogura (1891–1944) to Keijo in December 1916.

In this research, six newspapers were examined. Three of them were published by the Governor-General of Korea: *Keijo Nippou* (Seoul, Japanese, 1906–1945), *The Seoul Press* (Seoul, English, 1906–1937) and *Maeil Sinbo* (Seoul, Hangeul, 1910–1945). The other three were civilian newspapers: *Chosen Jihou* (Fuzan, Japanese, 1894–1941), *Fuzan Nippou* (Fuzan, Japanese, 1907–1945) and *Chosen Shimbun* (Jinsen, Japanese, 1908–1942).

It has turned out to be impossible to find the original pages of two of these six newspapers of December 1916, namely of *The Seoul Press* and *Chosen Jihou*, either in Japan or in Korea, because of the sad history of oppression of Chosen journalism by Japan's annexation of Korea.

In *Keijo Nippou*, twenty-five articles and six photos related to Suye Ogura have been found and in *Maeil Sinbo*, ten articles and two photos of her. A comparison of two newspapers has shown that most of the articles in *Maeil Sinbo* are very similar in content to the ones in *Keijo Nippou* and were usually published at the same time or one day later than the latter.

In *Fuzan Nippou*, three articles on her and in *Chosen Shimbun*, eleven articles and three photos related to her have been found. The articles from *Fuzan Nippou* tell us the route and the name of the ship that she used for her travel. Some of the articles in *Chosen Shimbun* contain different information from that of *Keijo Nippou* and *Maeil Shinbo*, including the background of her appointment as piano teacher at the Metropolitan Conservatory in Chicago. The fact that *Chosen Shimbun* was the first newspaper to announce her visit to Keijo, prior to the Governmental newspapers, appears important in fathoming the significance and background of her concert tour to Keijo.

Keywords: Suye Ogura, Pianist, Keijo, Maeil Sinbo, Chosen Shimbun

要 旨

本論は、ピアニスト小倉末子（1891～1944）の朝鮮への演奏旅行（1916年12月）について、当時朝鮮半島で発行されていた新聞各紙でどのような報道がなされていたのかを調査した結果を総括するものである。日韓併合（1910年）前後の新聞統制の問題と、それに起因する新聞史料保存の問題は今も大きく尾を引いているが、2013年2月と5月の韓国訪問時には多くの機関や研究者の助力を得て調査を実施することができた。

本論では、政府系3紙（『京城日報』『ソウル・プレス』『毎日申報』）と民間紙3紙（『朝鮮時報』『釜山日報』『朝鮮新聞』）を論じる。この内、『ソウル・プレス』と『朝鮮時報』については、1916年12月の紙面を見出すことができなかった。特に『ソウル・プレス』は英字新聞として、日本語やハングルの新聞よりも専門的な音楽記事が書かれた可能性が期待されるだけに、紙面が保存されていないという史料状況は痛恨事である。

朝鮮総督府機関紙の日本語新聞『京城日報』には25件（写真6点）、同ハングル新聞『毎日申報』には10件（写真2点）の記事が見出されて、小倉の演奏旅行の詳細に加えて、養育歴や音楽歴についても多くの情報が得られた。両新聞の記事の比較から、『京城日報』が主たる報道機関であり、『毎日申報』はそれに従属する立場にあったと理解されたが、後者の一記事から、小倉の訪問した学校名が京城女子高等普通学校と判明したのは一つの収穫であった。

民間紙の『釜山日報』には3件、『朝鮮新聞』には11件（写真3点）の記事が見出され、関釜連絡船の使用船名（崆岐丸）やシカゴでの音楽院ピアノ教授就任の前史に関わるエピソードを収集することができた。『京城日報』と『毎日申報』に先立って民間紙の『朝鮮新聞』で小倉末子の京城訪問が報じられていることは、1916年12月の京城演奏旅行の経緯と意義を理解する上で重要な意味を持ってくると考えられる。

キーワード：小倉末子、ピアニスト、京城、毎日申報、朝鮮新聞

I. はじめに

本論は、『女性学評論』第23号（2009年3月発行）に掲載した「旅する女性ピアニスト～小倉末子の朝鮮演奏旅行」の続編という性格を持つ。前回の論考では、それまで知られていなかったピアニスト小倉末子¹（1891～1944）の朝鮮への演奏旅行（1916年12月）について、邦字新聞『京城日報』掲載の記事25件を主な手掛かりとして、その実態を再構築すると共に、小倉末子の幼児期の養育歴や嫂マリアの付添いのあり方を明らかにした。その後、朝鮮における新聞報道の広がりを追って調査を継続したところ、日韓併合（1910年）前後の新聞統制の問題と、それに起因する新聞史料保存の問題とに直面することとなり、予想以上の難航を見たが、今年（2013年）2月と5月に韓国訪問の機会が与えられて²、当面の調査を終えることができた。その成果を総括するのが本論の目的である。

II. 朝鮮の新聞

李相哲『朝鮮における日本人経営新聞の歴史（1881-1945）』（角川学芸出版、2009）によれば、日露戦争（1904～1905）を契機に朝鮮半島では多くの日本人経営新聞が創刊され、「朝鮮言論史上、暗黒期として記憶される1910年から20年までの『武断統治』下の言論界」においては、言論統制によって「朝鮮人経営新聞は姿を消し、総督府機関紙が世論をリードした時代であるが、日本人経営の民間紙は、比較的自由にものがいえる時代でもあった」という（同書、6～7頁）。当時、韓国統監府（1910年以降は朝鮮総督府）の機関紙として、『京城日報』（日本語）、『ソウル・プレス *The Seoul Press*』（英語）、『毎日申報叫일신보』（ハングル）の3紙が次々と発行された（同書、97頁）。

まず、『京城日報』（ソウル、日刊8頁、日本語、1906-1945）が「対韓保護政治の施策に就き之を中外に宣明し、誤認疑惑を一掃するため」、1906年9月1日に創刊された（同書、98頁）。これは初代統監伊藤博文が『漢城新報』と『大同新報』を合併し、韓国統監府の機関紙として発行したものである。

次に、反日言論の高まりに対抗し、国際世論を日本に有利な方向へと誘導するために英字新聞『ソウル・プレス』（ソウル、日刊 8 頁、英語、1906-1937）を1906年12月25日に創刊し（同書、109頁）、さらに日韓併合の翌日（1910年 8 月30日）から『毎日申報』（ソウル、日刊、ハングル、1910-1945）を発行した（同書、86頁）。

『毎日申報』は、そもそもイギリス人アーネスト・トーマス・ベセル Ernest Thomas Bethell（1872-1909）が1904年に発行した『大韓毎日申報 *The Korea Daily News*』で、反日運動の先頭に立つ朝鮮民族紙として論戦を張った。これをベセルの死（1909年 5 月 1 日）後、1910年 5 月21日に統監府が700ポンドで買収し、日韓併合が完了した翌日（1910年 8 月30日）から『毎日新報』と改題し、総督府機関紙として発行を続けたものである（同書、86頁）。

こうした状況下、小倉末子の京城演奏旅行当時（1916年）に朝鮮半島で発行されていた新聞は、次の15紙に上る（表 1 参照）。この表 1 は、李相哲の「朝鮮における日本人経営新聞一覧（1881-1945）」（前掲書、224-227頁）に基づいて作成したものである。

この内、今回の調査対象は上位 6 紙（*印）である。これら 6 紙は、小倉末

表 1) 「朝鮮における日本人経営新聞一覧（1881-1945）」より1916年発行15紙

* 『朝鮮時報』（1894-1941）日、釜山、日刊 6 頁 【1916年12月分は残存せず】
* 『釜山日報』（1907-1945）日、釜山、日刊 6 頁
* 『朝鮮新聞』（1908-1942）日、仁川、日刊 4 頁
* 『京城日報』（1906-1945）日、ソウル、日刊
* 『毎日申報』（1910-1945）韓、ソウル、日刊
* 『セウルプレス』（1906-1937）英語、ソウル、日刊 8 頁 【1916年12月分は残存せず】
『元山毎日新聞』（1909-1941）日、元山、夕刊 8 頁
『木浦新報』（1899-1941）日、木浦、菊判、1913年から日刊
『光州日報』（1912-1941）日、光州、日刊 【国会図書館関西館所蔵は2002年以降】
『全北日々新聞』（1912-1945）日、全州、日刊 4 頁
『朝鮮民報』（1913-1941）日、大邱、日刊 4 頁 【国会図書館関西館所蔵は1958-59年】
『平壤日々新聞』（1912-1920）日・韓、平壤、日刊 4 頁
『西鮮日報』（1907-1920平壤毎日と合併）日、鎮南海、夕刊 4 頁
『鴨江日報』（1910-1945）日、新義州、夕刊 4 頁
『北韓日報』（1910-1919）日、清津、日刊

子の演奏旅行の経路に関わる地域で発行されており、記事掲載の可能性が高い。これら6紙を、政府系3紙（『京城日報』『ソウル・プレス』『毎日申報』）と民間紙3紙（『朝鮮時報』『釜山日報』『朝鮮新聞』）に分けて検討する。

Ⅲ. 朝鮮総督府機関紙に見る報道

まず、政府系3紙（『京城日報』『ソウル・プレス』『毎日申報』）について検討する。

日本語の機関紙『京城日報』（ソウル、日本語、日刊8頁、購読料55銭、1906-1945）については、国会図書館東京本館新聞資料室所蔵のマイクロフィルムで閲覧可能で、1916年11月から12月にかけての紙面に、小倉末子に関する記事25点（写真6点）が見出されたことは、すでに前回の論考で詳述した通りである。

英語の機関紙『ソウル・プレス』（ソウル、英語、日刊4頁、購読料不明、1906-1937）は、国会図書館東京本館新聞資料室所蔵分が1910年1月28日から1914年12月29日までに限られており、国内では閲覧の可能性が見込めないため、今回の韓国での現地調査で最も重視していた新聞である。しかしながら、懸案の1916年の紙面は韓国ソウルの国会図書館にも、また韓国新聞学の第一人者である鄭晋錫韓外国語大学名誉教授³の私設図書館にも所蔵されておらず、残念ながら紙面そのものを見出すことができなかった（ソウル大学図書館所蔵分も1911年からの約10年分が欠落しているとの情報を得た）。梨花女子大学図書館の司書が現在のソウル・プレス社にも電話して問い合わせたが、発行元の新聞社にも残されてはいなかった。総督府の支配下にあった紙面については、日本統治終了後、社屋の前に運び出して燃やしたという話も伝わっており、韓国内で当時の紙面を見出すことはほぼ不可能と思われる。

ハンゲルの機関紙『毎日申報』（ソウル、ハンゲル、日刊4頁、購読料30銭、1910-1945）については、韓国言論振興財団のMEDIAGAONのサイト（<http://www.kinds.or.kr/>）で古新聞の原紙検索を行い⁴、小倉末子報道の記事10件（写真2件）を見出した（表2参照）。

これらの記事を、『京城日報』掲載の記事と比較すると、報道内容は概ね重複しており、全体に簡略化されていることが分る。『毎日申報』の紙面掲載のタイミングは、大半が『京城日報』と同日(表2のNos. 1, 9)か一日遅れ(同、Nos. 2, 3, 6, 8)であり、例外は一例のみである⁵。ここから『京城日報』の記事を抜粋加工して『毎日申報』に掲載したという印象を受ける。

その中で、唯一、1916年12月22日の記事(同、No. 7)「小倉女史女学参観、ピアノを弾き聴かせた」は、『京城日報』では報道されなかった内容を持っている。この記事は、「音楽家小倉女史は20日、京城女子高等普通学校⁶を参観し、同校の広い講堂で得意のピアノを1曲演奏して、同校の生徒に聴かせた。」と伝えており、小倉末子が訪問した学校名が具体的に記されている。『京城日報』では1916年12月28日の記事に「小倉末子嬢の滞京中に女学生の間に右の手を口にあて、軽く咳をする態(こなし)が流行した▲これは何でも女史が女学校を訪問したときにやった態を真似したものだと言らうことだが流行心理は妙なものだ」とあるのみで、訪問先の学校名はこれまで不明であった。

表2)『毎日申報』(ソウル、日刊4頁、ハングル、1910-1945)の記事10件(写真2件)

『毎日申報』(ソウル、日刊4頁、ハングル、1910-1945)記事9件(写真2件)

- 1) 1916-11-30(木) 3面5段、荣誉스는音楽家小倉嬢
- 2) 1916-12-13(水) 3面3段、小倉嬢의演奏
- 3) 1916-12-16(土) 3面2段、樂壇의明星
- 4) 1916-12-17(日) 3面3段、小倉嬢은天生の音楽癖이라 【写真1】
- 5) 1916-12-20(水) 3面5段、明日은青年会에난
- 6) 1916-12-21(木) 3面1段、聽衆을酔케는微妙스흔音律 【写真2】
- 7) 1916-12-22(金) 3面4段、小倉女史女学参観
- 8) 1916-12-23(土) 3面4段、第二回의彈奏, 소창 여사의 음악회
- 9) 1916-12-24(日) 3面3段、昌徳宮御前演奏
- 10) 1918-4-24(水) 小倉末子女史는朝鮮教化事業에

なお、『毎日申報』の音楽記事については、孫泰龍による総索引が出版されており⁷、これを梨花女子大学音楽図書館で閲覧することができた。この総索引では、表2に掲げた記事10件の内、6件(Nos. 1, 2, 3, 4, 6, 9)は採録されているが、他の4点(Nos. 5, 7, 8, 10)は挙げられていないことを付記

しておく。

以上、小倉末子報道記事の比較から、共に朝鮮総督府の機関紙であった『京城日報』と『毎日申報』の間には密接な関係があり、記事内容および掲載時期の異同から見て、『京城日報』が主たる報道機関であり、『毎日申報』はそれに従属する立場にあったことが如実に感じ取られる。実際、大正6年版の『新聞総覧』は『毎日申報』を「京城日報の直営」(774頁)と明記し、李練『朝鮮言論統制史—日本統治下朝鮮の言論統制』(信山社、2002)は両紙について「同一社内発行」と述べており(211頁)、この関係を裏付けている。

IV. 民間紙に見る報道

次に、民間紙3紙(『朝鮮時報』『釜山日報』『朝鮮新聞』)を順に検討する。民間紙については、1)新聞の性格、2)調査の方法、3)記事内容の検討、という手順で述べる。

IV-1. 『朝鮮時報』

『朝鮮時報』(釜山、日刊6頁、日本語、購読料40銭、1894-1941)は「創立最も古くして明治25年2月初号を出せり」という歴史を持ち、発行元は合資会社朝鮮時報社(社長高木末熊)である。『朝鮮時報』については、韓国国史編纂委員会「韓国歴史情報統合システム」(<http://www.history.or.kr>)で新聞原紙検索が可能であるが、1916年発行分の内、ここに収録されているのは7月分と8月分のみで、小倉訪問時の12月の紙面は残念ながら見出すことができなかった。

IV-2. 『釜山日報』

『釜山日報』(釜山、日刊6頁、日本語、購読料50銭、1907-1945)は、「明治38年2月の創刊にして、同40年10月1日……[従来の『朝鮮日報』を]『釜山日報』と改題」した「個人経営」(社長芥川正)の日刊紙である⁸。『釜山日報』も上述の「韓国歴史情報統合システム」に収録されており、ここで新聞原紙検

索を行って、次の記事3件を得た。

表3)『釜山日報』(釜山、日刊6頁、日本語、1907-1945)の記事3件

-
- 1) 1916-12-17(日) 5面7段「小倉女史通過」「音楽家小倉末子女史は其生母マリ子女史と共に十五日夜釜山上陸即夜京城に向へり」
 - 2) 1916-12-17(日) 5面8段「連絡船上陸客」「十五日夜入港壱岐丸五十五名の内一等三名二等四十二名の氏名(一等)釜屋六郎、小倉まり子(二等)永田義原、加藤友二、小池義武、根本保外二名、李板武、高藤元三、趙寅変」
 - 3) 1916-12-25(月) 2面7段「公人私人」「小倉末子女史(音楽家)京城に於ける音楽演奏を終へ生母まり子女史と共に二十三日夜釜山通過帰東」
-

釜山は朝鮮半島で最初の開港地⁹であり、下関との連絡船(関釜連絡船、1905年開設)の発着港として交通の要所であった。その性格が『釜山日報』にも反映されて、関釜連絡船の上級船客についての報告記事が掲載されている。『釜山日報』の記事によって、小倉末子の渡鮮時の足取りが初めて明らかになった。小倉末子は嫂マリアと共に「壱岐丸」の一等船客として、12月15日夜に釜山港に入港し、12月23日夜に釜山港から下関に向けて出航していったのである。

IV-3. 『朝鮮新聞』

『朝鮮新聞』(仁川、日本語、日刊4頁、購読料45銭、1908-1942)は1908年12月1日に仁川で創刊された同人経営(社長萩谷壽夫)の総合紙で、『新聞総覧』大正6年版によれば、「朝鮮新聞は明治23年に創刊したる朝鮮最古の新聞たる朝鮮新報及び朝鮮タイムスの二新聞を合併したるものにして、京城日報が朝鮮総督府の機関紙たるに対し、同新聞は朝鮮に於ける民意代表機関の白眉たり」(775頁)と高らかに謳っている。同紙は、「1910年以降も民意を代表する新聞社として総督府の出す『京城日報』とは対極にあり双璧をなしたとも評価され」(李相哲、前掲書、48頁)、「1942年2月、総督府の一道一紙政策によって廃刊するまで……『京城日報』とともに朝鮮の二大新聞の一つとして君臨」(同書、47頁)したという。したがって、『朝鮮新聞』には、朝鮮総督府機関紙

とは異なる報道が期待される。

『朝鮮新聞』は、国会図書館東京本館新聞資料室に所蔵されており、マイクロフィルム閲覧によって記事検索を行った結果、次の記事11件（写真3件）を得た。

表4 『朝鮮新聞』（仁川、日刊6頁、日本語、1908-1942）の記事11件（写真3件）

1)	1916-11-16(木)	第5529号	5面6段	「小倉米 [ママ] 子嬢▽大演奏會開催」
2)	1916-11-17(金)	第5530号	5面2～3段	「閨秀洋琴家=近く來鮮せんとする小倉末子女史=」 【写真1：顔写真】
3)	1916-12-07(木)	第5559号	5面6段	「小倉末子女史▽愈十七日入京」
4)	1916-12-12(火)	第5554号	5面6段	「小倉女史演奏▽京城の慈善音楽會」[演奏曲目一覧つき]
5)	1916-12-15(金)	第5557号	5面5段	「小倉女史演奏期日変更」
6)	1916-12-17(日)	第5559号	2面7段枠外	「連絡船上陸客」
7)	1916-12-17(日)	第5559号	5面4～6段	「小倉末子女史▽令姉と共に來たる」【写真2：顔写真】
8)	1916-12-18(月)	第5560号	3面6段	「京城の噂」
9)	1916-12-19(火)	第5562号	5面4段	「小倉女史出演▽十九日午後八時より」
10)	1916-12-21(木)	第5563号	5面1～3段	「琴線も断れるかと、力強い雄々しい小倉女史の演奏」 【写真3：小倉末子嬢の演奏=朝鮮ホテルにて】
11)	1916-12-22(金)	第5564号	5面3段	「御前演奏▽小倉末子嬢の面目」

これらの記事の内容を、本論末尾の附録「『朝鮮新聞』の記事一覧」に掲げる¹⁰。

『朝鮮新聞』の記事を『京城日報』および『毎日申報』の記事と比較すると、興味深い点として、次の3点が浮かび上がる。

第一に、小倉末子の朝鮮訪問を政府系機関紙に先立って『朝鮮新聞』が伝えていること。『京城日報』および『毎日申報』での報道は11月30日以降であるが、『朝鮮新聞』ではそれより二週間前の11月16日と17日に報道を始めている。特に11月17日の記事（附録の記事一覧の記事2）は主な経歴や顔写真まで入っており、『京城日報』や『毎日申報』の記事内容を先取りした形になっている。一方の『京城日報』は、11月17日（第3299号）2面で皇后の「音楽学校行啓」を報道し、「第二部演奏小倉末子のピアノ田中久子のヴァイオリン等」と小倉に言及しているものの、小倉の朝鮮訪問については何も触れていない。

第二に、車内でのインタビュー記事の内容が大きく異なっていること。12月

16日朝、釜山から京城へ到着する列車に記者が乗り込んで車中でインタビュー取材を行ったが、『京城日報』では主に小倉の生い立ちを報道¹¹し、『朝鮮新聞』では戦時の欧州ならびにアメリカの音楽事情を小倉から聞き取って報道しており（記事7）、記事内容にほとんど重複が見られない。ここから、『京城日報』記者の取材とは別に『朝鮮新聞』記者の取材が行われたと考えられる。

第三に、小倉のシカゴでの音楽院ピアノ教師就任の前史が語られていること。12月18日の記事「京城の噂」（記事8）は、次のように伝えている。

十六日、小倉末子女史と共に来た金髪の嫂さんはよく話す気持ちの好い人だが、自動車の中で同乗の記者に語るよう▲末ちゃんと昨年米国に渡つた際、はじめの裡は音楽学校では日本人の音楽家だから左程上手ではなからうと言って居ましたがだんだん評判が高くなるので或日其校長が末ちゃんのピアノを聴かして貰い度いと云って来ました。然し妾は『小倉はあなたの学校の生徒さん方に聴せる程の腕前はありません』と断ってやりましたが、それでも二度も三度も頼みに来ました」と

このような経緯は、『京城日報』および『毎日申報』では伝えられておらず、『朝鮮新聞』の記者が独自に密着取材を行っていたことが窺われる。小倉がシカゴのメトロポリタン音楽院の高給ピアノ教授となったことは多くの新聞で報じられているが、そこに至る経緯について語っているものは目下のところ、この記事1点である。小倉末子の書簡や日記といった史料が子孫の手元に残されていない現状では、貴重な証言を伝えるものと位置づけられる。

以上のように、民間紙には政府系機関紙にはない報道記事が含まれているものの、ピアニスト小倉末子の来訪を歓迎し、演奏会の告知に留まらず、生い立ちや経歴などに及んで幅広い報道を行っているという点では一致している。官民を挙げて歓迎された様子が窺える。

V. おわりに

本論では、『京城日報』『ソウル・プレス』『毎日申報』の政府系3紙と、『朝鮮時報』『釜山日報』『朝鮮新聞』の民間紙3紙とに見る小倉末子の京城演奏旅行に関わる報道記事について検討を行った。

この内、『ソウル・プレス』と『朝鮮時報』については1916年12月の紙面を見出すことができなかった。特に『ソウル・プレス』は英字新聞として外国人宣教師等を主な読者としており、日本語やハンゲルの新聞よりも専門的な音楽記事が書かれた可能性が期待されるだけに、紙面が保存されていない（少なくとも現状では閲覧の可能性が断たれている）という史料状況は痛恨事である。

朝鮮総督府機関紙の日本語新聞『京城日報』には25件（写真6点）、ハンゲル新聞『毎日申報』には10件（写真2点）の記事が見出されて、小倉末子の演奏旅行の詳細に加えて、養育歴や音楽歴についても多くの情報が得られた。この両新聞の記事の比較から、『京城日報』が主たる報道機関であり、『毎日申報』はそれに従属する立場にあったと理解されたが、『毎日申報』の一記事から、小倉末子の訪問した学校名が京城女子高等普通学校と判明したのは一つの収穫であった。

民間紙の『釜山日報』には3件、『朝鮮新聞』には11件（写真3点）の記事が見出されて、関釜連絡船の使用船名（沓岐丸）や、シカゴでの音楽院ピアノ教授就任の前史に関わるエピソードを収集することができた。『京城日報』に先立って、民間紙の『朝鮮新聞』で小倉末子の京城訪問が報じられていることも、1916年12月の京城演奏旅行の経緯と意義を理解する上で重要な意味を持つてくるものと考えられる。

今回の調査では、日韓併合という悲しい歴史的事実が、新聞史料の保存にも大きな影を投げかけていることを知ったが、同時に韓国の研究者や研究機関の親切さを身に沁みて知ることができたのは、大きな喜びであった。

なお、これら多くの新聞が伝えるように、小倉末子の京城での演奏会は「日本組合教会朝鮮人婦人会並に京城基督教青年会の主催」によるものであった。

日本キリスト教の朝鮮伝道については、組合教会が先頭に立ち、神戸教会の牧師であった渡瀬常吉が朝鮮伝道主任として率いたという経緯があるが、この問題については稿を改めて論じたい。

謝辞：本論は神戸女学院大学研究所2013年度研究助成によって支えられている。ここに記して謝意を表する。

附録：『朝鮮新聞』の記事一覧（11件、写真3件）

1) 11月16日(木) 第5529号 5面6段「小倉米 [ママ] 子嬢▽大演奏会開催」

久々に米国より帰朝し東都にて燃ゆるような歓迎を受けたるピアニスト小倉米 [ママ] 子嬢はいよいよ来月初旬来鮮し同十四日朝鮮ホテルに於て大演奏会を開催する事に決せりと

2) 11月17日(金) 第5530号 5面2～3段「閩秀洋琴家 (ピアニスト) = 近く来鮮せんとする小倉末子女史 =」【写真1：顔写真】

我が楽壇に於て女流ピアニストとして其天才を遠く欧米の楽壇に歌われて本年四月帰朝したる小倉末子女史が近く来鮮して朝鮮ホテルに其天才を誇ろうとすることは昨紙に報じた所であるが、同女史は確か明治四十四年の頃東京音楽学校へ入学した。然し神戸の女学校時代から音楽には抜群の成績で、音楽学校へ入っても予科の過程を踏まず △一足飛びに本科へ入学した。然し女史の天才の閃めきは之に満足し得ず勧めらるゝまゝに独逸に遊学することゝした。翌年伯林王立音楽学校の入学試験にはブラムス [ブラームス] のバーレーションに [ヴァリエーションを] 弾いて先生達を驚かしめ、日本に於ける斯界の權威を示したと云い得る程、美事なものであつた。入学後に於ける女史の熱心と努力は非常なもので、その音楽的天才は忽ち火花の如く発し、彼の天才教授の名あるバルト教授には △其天分を認められて熱心なる指導を受けた。而して昨年三月卒業の筈で

あったが、不幸欧州戦乱の勃発によって意を達せず止むなく英国に渡り更に米国に転じて紐育に暫く居たが、偶々旧師ロイター氏が市俄古の音楽学校に教鞭を執って居た爲め懇望されて同市に到り益々其天分を磨くと共にメトロポリタン、コンサーバトリーの高級教授として教えて居た。旁々同地に於ける各音楽会に出席してミス小倉の名は △博く全米国に 識らるゝに至つたのである。女史は今春四月帰朝して音楽学校に奉職して音楽会等には時折出演したが、今度朝鮮へ来るなどは意外であると女史を知る人は語って居る。朝鮮ホテル等へ来る外人も殆んどミス小倉の名を知らないものは無いというが、何等の影もない朝鮮の楽壇に輝きの盤上を如何に權威あるものとせしめるであらう。

3) 12月7日(木) 第5559号 5面 6段「小倉末子女史▽愈十七日入京」

去月十六日畏多くも 皇后陛下の御前に於て『サン、サーンス氏作曲狂想曲』を独弾して一世の面目を施したる小倉末子女史は愈々来る十八日午後八時より朝鮮ホテルに於て、十九日(火)午後七時より鐘路通り中央青年会館に開かるべき慈善音楽会に出演すべく決定せり、故に同女史は令嬢「ママ」を伴い十七日頃入京すべしという

4) 12月12日(火) 第5554号 5面 6段：「小倉女史演奏▽京城の慈善音楽会」

予記の日本組合教会朝鮮人婦人会並に京城基督教青年会の主催に係る慈善音楽会の曲目は左記の如く決定したり、就中小倉末子女史のピアノ独奏は聴衆をして恍惚たらしむるものあらん

▲十八日午後八時 (於朝鮮ホテル)

◎第一部

- (一) 四部合唱グノー作「自由の名により」京城合唱団
- (二) ピアノ独奏バッハ、リット [リスト] 作「プレリユード及フューグ (イ短調)」小倉末子女史
- (三) 独習シュベルト作「巡礼」ド、コベン [ママ] 作「牢番」スミ

ス牧師

(四) ピアノ独奏ショパン作「バラード」小倉末子女史

◎第二部

(五) 独唱デンザ作「五月の朝」ヴァンバスカー学士

(六) ピアノ独奏サンサン [ママ] 作「キャプリーズ」小倉末子女史

(七) 独唱グノー作「子守唄」ゲルトルード、ハーデー嬢

(八) ピアノ独奏リッツリ [リスト] 作「オボード、デュレソース (泉のほとり)」、デブユシー [ドビュッシー] 作「プレリユード」
小倉末子女史

▲十九日午後七時 (於鐘路青年会館)

◎第一部

(一) 独唱マークス作「賊魁」スミス牧師

(二) ピアノ独奏バッハ、リツト [リスト] 作「プレリユード及
フューグ (イ短調)」小倉末子女史

(三) 独唱アドルフ、アダム作「聖夜」アッペンゼラー嬢

(四) ピアノ独奏ショパン作「ファンタジヤ、インプラムチュー」「ベルソーズ」小倉末子女史

◎第二部

(五) 独唱ヘレンウェア作「朝のよろこび」ゲルトルード、ハーデー嬢

(六) ピアノ独弾サンサン [ママ] 作「キャプリーズ」小倉末子女史

(七) 四部合唱グノー作「自由の名により」京城合唱団

(八) ピアノ独奏シューマン作「プロフェチックバード」、デブユシー
[ドビュッシー] 作「トツカタ」小倉末子女史

右の中小倉末子女史ピアノ独奏サンサン [ママ] 作『キャプリーズ』及びシューマン作『プロフェチックバード』は 皇后陛下御前に於て演奏せしものなりと

5) 12月15日(金) 第5557号 5面5段「小倉女史演奏期日変更」

既報小倉末子女史出演の慈善音楽会は十八、九の両日開催の筈なりしも十八日は大山元帥埋棺式当日なれば开を変更して十九日午後八時より朝鮮ホテルに、二十一日午後七時より鐘路中央青年会館に於て各開催する事に變更せり、因に小倉末子女史は十四日朝東京出発十六日朝南大門駅着の筈にして演奏曲目には變更なし

6) 12月17日(日) 第5559号 2面7段左枠外：「連絡船上陸客」

十五日夜壱岐丸にて一等三名二等十名三等四一名(一等)小倉米[ママ]子、小倉すま子[ママ]、釜屋六郎海軍少将(二等)永田義源、加藤双二、小池義武、[以下判読不可]

7) 12月17日(日) 第5559号 5面4～6段：「小倉末子女史▽令姉と共に来たる」

【写真2：顔写真】

世界の宝と某外人が語った我楽壇の権威者たる閨秀洋琴家(びあにすと)小倉末子女史は令姉と共に予定より約二時間遅れて十六日午前十一時無事南大門駅に着いた。之より先途中まで出迎えた記者を其車室に導いて『まあお寒いのに朝早くから態々!』と流暢な日本語で丁寧な挨拶されたのは金髪の令姉、其横には、素張した見るからに感じの好い洋装して慎まやし[ママ]かにその膝に両手を組んで居るのが、これぞ世界の楽壇に誇るべき小倉末子女史であった、『色々と御骨折りに預りまして御蔭で朝鮮の土を踏むことが出来ました』と黒い瞳を心持ち下げた女史は

◎引締つた口元に柔らかな笑が洩れる。『何を[ママ]申しましても初めての土地で御座いますから御期待遊ばす皆様に失望させやしないかと案じまして…』と謙遜しながら『欧州の楽界で御座いますか、わたくしが独逸を立ちましたのは戦争が始まってから二週間目で御座いましたが国内挙って騒いで居り乍らも、音楽会が慈善の名によって隔日位には催されて居ました。単に音楽会のみならず歌劇の如きも、これまで築き上げたも

のを戦争の爲めに打壊さないようにしようとする努力と、軍資献上の勇々しい決心とによって何も彼も其背後には『戦争の爲め』という觀念が始終国民の頭にありますので音楽方面は益々盛んになる様子で御座いましたが、果して今日に於ては非常な勢いを以て

◎新しい作曲 が試みられて居るようで御座います。亜米利加も亦此頃では音楽熱が一般に普及されて来ました。それは戦乱の爲めに各地から有名な音楽家が集まって来た爲めです。例えばピアニストでは露西亞のゴトフスキーとか、ポーランド人のパデレフスキーとか、フォフマンの如き、バイオネスト [ママ] では奥匈国人で一度戦場に出て足を傷き跛になったクライスラーとか独逸人のエルマンの如き何れも世界で有名な音楽家が集まって来ましたので、盛んになった訳で御座います。それで独逸皇帝は、我国の大臣よりも好い給料で亜米利加は招くので皆音楽家が行く』とおっしゃった位です、殊に歌劇役者のミス、ファイラーの如きは、

◎皇帝や大統領 のように特別列車で各地を興行して居ますのには、驚かされます』とピアニストに相応しい綺麗な手を眼の上に翳しながら『今度弾みます中でリット作プレリユード及フューグを除きますれば何れも素人の方々でもよくお判りになりましようと思ひます。御前演奏のシューマン作曲『プロフェチックバード』も今度弾む筈になつて居りますが此曲は有名な所の景気という曲で一番好い所をとつたもので鳥が預言者で預言するという意で鳥が飛ぶさまや啼き声などを見事に表現したもので御座います尚デブユレー [ママ] 作曲『トッカタ』は最も新しい曲で御座います

8) 12月18日(月) 第5560号 3面 6段 : 「京城の噂」

▲京城在住の外人の中で最も日本語の巧いのはメソヂスト教会監督のスミスさんだが、此の間の同教会献堂式の際、ウェルチ博士の通訳振りは実に美事なもので、非常に困難なアクセントや動詞、形容詞などは申し分が無かったと某高官は語つて居た▲此の人は目下外人仲間に於ける日本語の先生ですき焼党だとの事だが、同夫人も亦日本語が上手、殊にスミスさんの

跋ひきつゝ演奏台に上って独唱する所は一種の神秘を感じしめる▲十六日、小倉末子女史と共に来た金髪の嫂さんはよく話す気持ちの好い人だが、自動車の中で同乗の記者に語るよう▲末ちゃんと昨年米国に渡った際、はじめの裡は音楽学校では日本人の音楽家だから左程上手ではなからうと言って居ましたがだんだん評判が高くなるので或日其校長が末ちゃんのピアノを聴かして貰い度いと云って来ました。然し妾は『小倉はあなたの学校の生徒さん方に聴せる程の腕前はありません』と断ってやりましたが、それでも二度も三度も頼みに来ました』と

9) 12月19日(火) 第5561号 5面4段：「小倉女史出演▽十九日午後八時より」朝鮮ホテルに滞在中の小倉末子女史は愈々十九日午後八時より朝鮮ホテル大食堂に於て得意の妙技を揮う筈なるが、入場券の如きは既に其大部分を売尽したりと云えば、如何に同女史のピアノが一般京城人士に憧憬れを以て迎えられ居るかを知るべし尚神戸女学院出身者十余名は十八日午後二時より西大門外丹羽氏方に集合し女史を招待して茶話会を催せり

10) 12月21日(月) 第5563号 5面1～3段：「琴線も断れるかと、力強い雄々しい小倉女史の演奏」【写真3：小倉末子嬢の演奏＝朝鮮ホテルにて】
メトロポリタン、コンサーバトリーの高級教授として其名欧米に知られ各地の音楽会に臨んではジャパニースピアニストの
△声明を到る所に 喧伝せられ今春帰朝してよりは東京音楽学校講師として畏多くも 皇后陛下御前演奏の榮譽を辱(かたじけな)うしたる小倉末子女史の慈善音楽会は十九日午後八時より朝鮮ホテルの大食堂で催された。華やかな万国旗と燦たる金屏風とによって演奏台は、もう申分ない背景となって居たが、若く美わしき洋琴の權威者の爲めに我社並に神戸女学院同窓生其他より贈られし
△花環に目も絢に 独逸製のピアノの両側に飾られて居た。会衆は、知ると知らざるの別なく七時頃から詰掛けて中には山縣政務総監のフロック姿

も見受けられ内外朝野の紳士淑女によって一層に華やかな会場としてしまった。やがて正八時、丹羽基督教青年会総務の挨拶があつて愈々演奏に移る。第一部は京城合唱団の名によってケープル、スミス、ミルス、バンバスターの四氏の四部合唱グノー作『自由の名により』に始まったが、劇『ファスト [ファウスト]』に出る兵士の唄う、勇ましいもの、これが終ると

△雪の如き胸に 数百の真珠を連ねたる襟飾り、美々しき洋装の裾も軽く表われたのが、我楽壇を世界に誇る洋琴家（びあにすと）末子女史、その嫵やかな姿、黒目勝ちの大きな瞳、引締った口元から洩る、微笑みは感謝の微笑である。聴衆からは、訳もなく喝采が起つて暫しは鳴も止まなかった。女史は軽く、ピアノの前の椅子に腰を下して、バッハ、リット [リスト] 作プレリュード及びフューグ（イ短調）を演奏し始めると聴衆は、知るものは首を垂れて酔心地となる、知らざるはその鍵盤の上に

△軽く閃き走る 白魚のような指先さては妙なる調べに奇異の眼を瞪るばかり。之れが済むと次ぎはスミス牧師の独唱『巡礼』『牢番』があり、更に末子女史のショパン作『バラード』に移つた、あのショパン一流の繊弱なメロディが織込れた『バラード』は

△テクニックの困難 も亦容易ではないが、女史の指端には全身の血が集つたかのように至大の力絶大の熱情に漲つて、訴うるが如く叫ぶが如く、唸るが如く、妙なる調は奏でられる。此一曲が終ると、聴衆は喝采した。断り兼ねて女史は続け様に同じくショパン [ママ] 作『ファンタジアンプロニテウ [ファンタジー・アンプロンプチュ]』を演奏した、曲目は第二部に移つてバアンバスター学士の独唱『五月の朝』も喝采裡に終え愈々末子女史の

△御前演奏曲 キャププライスに移る、曲はサンサン [サン＝サーンス] の曲である。演奏者は末子女史である。申分なく聴衆を夢の境に引き入れて終つた。女史は更に『ベルシェース（子守唄）』を演奏して喝采に酬た。続いてハーデー嬢の（子守唄）の独唱があつて後末子女史は六回目のピア

ノに対す。リツト [リスト] 作『オボード、デュレソース (泉のほとり)』とデブユシー作『プレリユード』を明瞭に然も美しく演出された其技巧の程には唯感嘆するのみであつた。聴衆は名残り欲さの余り更に一曲を懇望してショパン作の『エテューデ (演習曲)』が演奏せられた。演奏は是れで終つたが聴衆は容易に立去ろうともしない程であつた、最後に斯る音楽会を催おされた主催者に感謝せずには置かれぬ。女史は廿一日夜改めて鐘路の青年会館で演奏の筈である。

11) 12月22日 (火) 第5564号 5面3段 : 「御前演奏▽小倉末子嬢の面目」

ピアニスト小倉末子女史は廿一日午後七時より京城鐘路青年会館に催されたる慈善音楽会に出演したるが廿二日午後二時より李王同妃殿下の御前に於て演奏すべしと

注

- 1 戸籍名は「小倉末」だが、3冊の著書と多くの演奏会プログラムで「小倉末子」を用いているので、本論では後者を採用する。
- 2 2013年2月に本学初の韓国語語学研修の引率として韓国ソウルの梨花女子大学に滞在した際、同大学音楽学部音楽研究所の Hyun Kyung Chae 教授等と交流を持ったのがきっかけで、同年5月に同大学を再訪して同研究所での講演を行った。
- 3 鄭晋錫『大韓帝国の新聞を巡る日英紛争：あるイギリス人ジャーナリストの物語』(李相哲訳、晃洋書房、2008) 他の著作がある。見も知らぬ一研究者からのメールに依て鄭晋錫先生にご紹介下さった李相哲先生、「日帝強占期」ジャーナリズム研究の第一人者でありながら日本人研究者の調査を親切に助けて下さった鄭晋錫先生に心から感謝申し上げる。
- 4 「小倉末子」の韓国語読み (so-chang-mar-ja) をハングル表記 (소창말자) に変換して検索を行った。検索と翻訳を助けてくれた小林陽太氏 (ソウル大学留学生) に感謝する。当時のハングル文字は現行のものとは異なった部分があり、解読には専門的な知識を必要とするため、梨花女子大学講師 Jeeyeon Huh 氏の助力を仰いだ。
- 5 鐘路青年会館での第2回演奏会を告知する独立した記事 (同、No.5) は、『京城日報』に一日先んじている。
- 6 京城女子高等普通学校は、1908年の「(勅令22号) 高等女学校令」によって開校さ

- れた朝鮮最初の高等女学校（官立漢城高等女学校）が、1910年の日韓併合に伴って改称されたものである。
- 7 孫泰龍『毎日申報 音楽記事 總索引：1910.8.30-1945.8.15』지음, 손태룡, 서울：民俗苑、2007
 - 8 『新聞総覧』大正6年版、日本電報通信社編、1917年。発行頁数や購読料は当時のもの。
 - 9 1876年、日朝修好条規（江華島条約）により開港した。これに元山（1880年開港）、仁川（1883年開港）が続いた。
 - 10 この記事一覧において、文中の一マス空白は原文の表記に従ったものであることを付記する。
 - 11 『京城日報』1916年12月17日（日）第3328号（夕刊）2面1～4段「軽く疲れた身体を／一等寝台車の柔らかいクッションに凭せて／ピアノから離れると淋しくて淋しくて／と、小倉女史、黒目勝ちの／涼しい眼をパチパチさせて語る」